

感動新聞 平成29年10月号 発行者 細川栄一
ビジネス経営の最前線で頑張っておられる方の役に立つ情報となればと思います。
喜んで頂ければ幸いです。

吉田松陰の死生観(留魂録)

旭利直前に江戸・小伝馬町牢屋敷の中で書き上げられた「留魂録」。
全十六節からなるこの留魂録は、「身はたとい武蔵の野辺に朽ちぬとも留め置かまし大和魂」という有名な拜
世の句を巻頭にして始まる。
中でも特筆すべき第八節は、「松陰」の死生観を語るものであり、現代に生きる私たちの心にも強く訴えかけ
てくる行(くだり)である。

【第八節(現代語訳)】

一、今日、私が死を目前にして、平穏な心境でいるのは、春夏秋冬の四季の循環という事を
考えたからである。

つまり、農事で言うくと、春に種をまき、夏に苗を植え、秋に刈り取り、冬にそれを貯蔵す
る。秋、冬になると農民たちはその年の労働による収穫を喜び、酒をつくり、甘酒をつくって、
村々に歓声が満ち溢れるのだ。この収穫期を迎えて、その年の労働が終わったのを悲しむ者が
いるというのを聞いた事がない。

私は三十歳で生を終わろうとしている。

未だ一つも事を成し遂げることなく、このままで死ぬというのは、これまでの働きによって育て
た穀物が花を咲かせず、実をつけなかつたことに似ているから、惜しむべきことなのかもしれない。

だが、私自身について考えれば、やはり花咲き実りを迎えたときなのであろう。なぜなら、
人の寿命には定まりがない。農事が四季を巡って営まれるようなものではないのだ。

人間にもそれに相応しい春夏秋冬があると云えるだろう。十歳にして死ぬものには、その十歳
の中に自ずから四季がある。二十歳には自ずから二十歳の四季が、三十歳には自ずから三十
歳の四季が、五十、百歳にも自ずから四季がある。

十歳をもって短いというのは、夏蟬を長生の霊木にしようと呼ぶことだ。百歳をもって長いとい
うのは、霊椿を蟬にしようとするような事で、いずれも天寿に達することにはならない。

私は三十歳、四季はすでに備わっており、花を咲かせ、実をつけているはずである。それが単
なる穀殻なのか、成熟した粟の実なのかは私の知るところではない。

もし同志の諸君の中に、私のささやかな真心を憐れみ、それを受け継いでやろうという人がい
るなら、それはまかれた種子が絶えずに、穀物が年々実っていくのと同じで、収穫のあつた年
に恥じないことになるであらう。

同志諸君よ、このことをよく考えて欲しい。(参考文献：古川董著「吉田松陰 留魂録」)

吉田松陰は死んでも、彼の思想・哲学は同志の心に受け継がれた。

師弟の関係は七世の縁。

あなたは誰に影響を受けてきましたか。

そして、誰に何を残していきたいですか。

人生観は死生観でもあります。

だから、今ここを大切にしたいですね。

「身はたとい武蔵の野辺に朽ちぬとも留め置かまし大和魂」